

水のない須津川

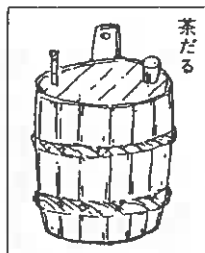
昭和六十二年六月五日号

須津地区を流れる須津川は、伏流水（かくれみづ）といって水が地下を流れてしまうため、いつもは水が流れていません。今回は、この須津川に伝えられているお話です。

大切な須津川の水

昔々、ある暑い日のことでした。一人の旅の僧（にき）が、汗をふきふき須津川のほとりまでやってきました。

ちようどそのとき、一人のおばあさんが川のほとりで水をくんでいたため、お坊さんは、「おばあさん、その水を一杯私にいただけませんか」と頼みました。しかし、おばあさん



は、「こんな大切な水を、縁もゆかりもない旅の人にくれることはできない」と、けんもほろろの答えてした。

お坊さんは仕方なく、また、とぼとぼと西の方を指して歩いていきました。

親切な女の人

そして赤洲川のほとりにきました。ところが、この川には水が一滴もなく、からからの河原でした。

がっかりしたお坊さんでしたが、川の土手伝いに女の人が出つてきたので、ぜひ水を欲しいとお願いました。すると女の人は、「それはお気の毒なこと」と急いで須津川まで行って茶だるに水をいっばい入れてきました。そして、「さあ、腹いっばいお飲みなさい」と

言つて、茶だるのまま差し出しました。

お坊さんの法力

冷たい水でのごを潤したお坊さんは、心からうれしそうに、「東の川には水が流れているのに、お願いしても一杯の水ももらえませんでした。この赤洲川には水がなくて、皆さんが困っているのに、こんなに親切にしないで」と、お礼を言つて西の方へ旅立つて行きました。

その翌朝、この女の人が赤洲川をのぞいてみると、不思議なことにきれいな水が流れていました。驚いた女の人は、急いで須津川まで行ってみました。すると、須津川の水はかれてからからに乾いていたそうです。